fantasy

黒澤 蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｆａｎｔａｓｙ

【Ｎコード】
Ｎ３８４７Ｆ

【作者名】
黒澤　蝶

【あらすじ】
私…戦争を終わらせます。旅立ちの日に少女は誓った

第1話［旅立ち］

生きるってどうゆうことだろう

信じるって何だろう

愛するってどんなのだろう

この旅で、僕はその答えを見つけられたのかな…

これは、最後の物語

上空都市セフィラ

世界を脅かす存在によって創り出されたこの大陸は、シンシアに住む人々にとっては恐怖の象徴であった

セフィラは地上から遥か上空にあり、そこには陽光溢れ緑輝く世界が広がっていた

セフィラに住むことができるのは、一部の王族や貴族、そして優秀な科学技術を持つものだけだった

セフィラとシンシアの間で戦争が起こった、原因はセフィラによる資源の乱用、セフィラを上空に浮かし維持するための“魔石“はシンシアの一部でしか得ることができないがセフィラの人間はそれを独占しようとしていた

突然のセフィラからの攻撃、

シンシアの人間はたった半年で人口の６割が減ってしまった

セフィラの科学力はシンシアの科学力を遥かに上回り空中からの無差別攻撃により遂にシンシアは敗戦直前まで追い詰められてしまった

しかし、シンシアにはセフィラにはできない技術を持っていた

魔石を使い魔法を使う事の出来る魔導師

魔石よりも珍しく種類も１２種類しか確認されていない幻石を使い幻獣を呼び出すことの出来る召喚師がシンシアの残された希望だった

１６歳を迎えた魔導師、召喚師はシンシアの各地を回り修行の旅をする

修行を終えた魔導師達は、直ちに敵地へと送られる事になった

この小さな村マリも１人の召喚師を修行に出すことになっていた

今夜、１６歳を迎えた召喚師テオの旅立ちの儀式が行われる

親友のカナタ、ユークリッド、テオは３人でユークリッドの家で集

まっていた

カナタが最初に口を開いた

「3人で集まるのも、今日が最後だな…」

テオは言う

「何言ってるの？絶対帰ってくるんだからね！」

「クソッ！何でテオが…」

ユークリッドは言った

「仕方ないよ、戦争だもん…それに私は、お母さんとお父さんを殺したテラを許さない！絶対に敵はとるんだから！！」

テラは戦争で両親を失った、それ以降はユークリッドの家で住んでいた

「なぁ、やっぱり俺達もついて行かないか？修行、テオ1人に行かせるのも…」

カナタは言った

「それは、俺も考えてた、テオ1人危険な目に合わせるわけにはいかない」

ユークリッドは頷いた

「カナタ…ユークリッド…」テオは涙を溜めて言った

「一緒に…来てくれるの？」

「もちろん！」カナタとユークリッドの声が重なった

狭い村に笑い声が響いた

「でもさ」とテオ

「ん？」カナタはテオの方を向いた

「カナタやユークリッドには家族がいるし…いいのかな…」

「だ～いじょぶだって」カナタは言う

「その家族を守る為の旅でもあるんだ…」ユークリッドは言った

「そうだぜ、戦争は俺達の手で終わらせるぜ！！！」

カナタは狩猟用の剣を振り回して言った

「ちょっとカナタ！危ないわね！」

とテオが怒鳴るとカナタは剣を振り回すのを止めた

「ま、いざとなったらカナタを盾にしてでもテオを守るよ」

ユークリッドは笑いながら言った

「ひでぇ！」
カナタは言った

３人はいつもこんな感じに笑いあっていた

そして、夜になり４６人の村人が皆、儀式の行われるマリの教会に集まっていた
テオは化粧をし、儀式用の、結婚をするとき村の人が着る服をきて儀式に臨んだ

カナタは小声で隣のユークリッドに言った「テオってあんなにキレイだったか？」

「……」

「お～い？」
カナタはユークリッドに声をかける

「……は！？あっ何だカナタ？」

「お前…みとれてたな？」

「なっぱっ馬鹿野郎そんなわけ…ないのであるぜ！！」

「わかりやす…」カナタは言った

「ではテオよ、汝は明日より…」

テオは目を瞑り儀式の言葉を聞く

「汝は明日より、召喚師として旅立つ、お前は旅を通じ…」
神父の長い話は終わり儀式も最後になった、儀式の最後、テオは皆に旅立ちの挨拶をしなければならなかった

「私はこれより、召喚師としてこの村を出ます、今日まで…今日まで皆私の事を家族のように接してくれて私は……私は」

テオの瞳には涙が溢れていた
１６年、この村で育った思い出が駆け巡った

「テオねーちゃん頑張って！」
小さな女の子が叫んだ

「ニコルちゃん……」テオは顔を上げてニコルを見た

「テオちゃんばっかり辛い思いさせてすまないな…」
男は言った

「ニックおじさん…」

「無理だけはしちゃいけないよ、テオちゃんは私の娘みたいなものだから」

「ラサおばさん……」

「みんな…ありがとう…」

テオは涙を拭いて言った

「私、戦争を終わらせます…絶対に！」

教会中に拍手がなった

村人は皆、明日旅に出るテオを精一杯の拍手で見送ろうとした

そして、儀式が終わり…

旅立ちの朝がやってきた

第2話［出発］（前書き）

誤字脱字などありましたら、感想にお願いします

第2話［出発］

テオは昔から気が強かったがよく泣いた、そんなテオを僕は一番身近で見てきた。

戦争が始まって１０年、セフィラによる無差別攻撃は、セフィラの魔石不足やシンシアの魔導師達の反撃で何とか防いでいる状態だ。

魔導師達は主に敵陣、つまりセフィラに向かいシンシアの軍の魔法部隊で戦う、召喚師は数が少ないが、幻獣とゆう特別な力を得ることが出来るため、最前線で戦う事が多かった、しかし、いくら強力な幻獣といっても、多くの機械相手にはやはり部が悪いようだった

そこでシンシアの王「デマドルア８世」は１６歳になった魔導師、召喚師の旅立ち、及び戦力化を義務化した

魔石を戦争のために使われる資金は村や街からの税金で得る、その重い税金のためその日暮らしの者や、税金を払えず即席兵として、戦争に１４歳で赴く者もいた

しかし、魔導師や召喚師を出した村は税が４割軽減される、マリの村も例外ではなく重い税に困っていた、そこでどうしても魔導師か召喚師が必要だった

マリの村で魔導師か召喚師の資質を持つものはテオただ１人しかいなかった

テオは両親の敵を討つため最も死ぬ危険が高く、しかし最も戦争に終止符をうてる可能性の高い召喚師を選んだ

１３歳で召喚師になり、１４歳で剣術も覚える、更には格闘技までも身に付けた
剣術と格闘技に関しては親友２人に教わった

カナタの力強い剣技、ユークリッドの流れるような動きからの蹴り、全てマスターした

もちろん、専門である２人にはかなわないがそれでもかなりのレベルまでテオの剣技、格闘技は達していた

旅立ちの日、３人は日が昇る前に村を出た

しばらく進んだ後、村を振り返りテオは幻獣
「アスカ」を呼び出した

アスカは、黄金に輝く大きな鳥で何とも美しく輝いている

「村で得たこの力、それに私には心強い味方がいる、大丈夫…行ってきます」

テオはアスカを首から下げている幻石に戻し村を後にする

「もう、いいのか？」ユークリッドは聞く

「うん、挨拶はすませたよ」

「じゃあ、行くか！」カナタは走り出す
「あ！待ってよー」テオは走ってついて行く

「全く…」ユークリッドもそう言ったあと走り出した

「はあ、はあ、はあ」3人は息を切らす

「ったく馬鹿野郎が！最初からムチャクチャしやがって」
ユークリッドは怒っている

村を出てから3人はずっと走っていた、テオはもはや限界といった顔で言った
「ご、ごめん…はあはあ、ちょっと…休ませて…」

「はあ、はあ、あっごめんテオ…大丈夫か！？」カナタはすっかり自分だけはしゃいだ事を反省した

「まあ、ここらで休憩するか」ユークリッドはテオの座る場所をつくり自分は地面に腰を下ろした

「ありがと」テオはユークリッドに礼をいい座った

「キャッ！」
テオは突然叫んだ

「どうした！テオ！」カナタは剣を右手に持ち身構える

「敵か！？」

ユークリッドも構える

「ち、違うの何かがお尻を…」

「フニ！？」

テオの座っていた場所から現れたのはドローマウスというモンスターだった

「ドローマウスか…驚かすなよ…」

カナタは剣をしまった

「イッ！」カナタがそう言った瞬間ドローマウスはカナタに襲いかかった

ドローマウスの頭突きがカナタに直撃した

「がはっ！」軽く吹っ飛ぶカナタ

「ちっ油断すんな！結構速いぞ！」ユークリッドは構えからドローマウスめがけてパンチを繰り出すが外れてしまい、逆にユークリッドも頭突きをくらう

「くっ！」

頭突きをくらい、一歩引いたユークリッドはすぐに構え、次はドローマウスの攻撃を見切り、かわしてから攻撃する戦法にチェンジした

構えているユークリッドに対し、警戒心もなくドローマウスは襲いかかったが、ユークリッドは難なくかわし、逆に鋭いパンチをドロ

ーマウスに浴びせた
ドローマウスは気絶はしなかったがかなりのダメージを負った
ドローマウスは逃げようとしたがカナタが回り込み
「逃がすかぁ！」
と剣を振り下ろそうとするが
「待って！」とテオの声が響いた
「待ってカナタ、その子ドローマウスにしては、攻撃的過ぎない？」
「確かに…ドローマウスが人間を襲うなんてよっぽどの事だ」ユークリッドは言った
「ん～何で？」カナタはドローマウスに聞くが当然言葉が解るわけがない
「もしかして」テオは言う
「もしかして、餌が少ないとか？ほら、戦争で地形が変わったりしてから、この辺りもモンスター自体住みにくい所にあるし…」
「だったら村にも被害がでてるはずだ、餌が少なくなったなら最近の事だな」
ユークリッドは言った
「原因を調べてみるか、このままじゃ、コイツら村を襲うぜ？」カナタがいう
「そだね、そうしよう」テオはドローマウスを見ていった

「君達の所に案内してくれないかな？」
ドローマウスはテオの周りを2週回ったあと、森のある方へ走り出した
「あの森にあるのね！」テオは走ってドローマウスを追いかける
「また…走るのか…」ユークリッドはそう呟いた
「元気だねぇ、召喚師様は」カナタは走ってあとを追いかけた
そのころ、森ではあるモンスターが猛威をふるっていた

第3話［召喚］

セフィラ
セフィラでは大きく分けて3つの国でできており、セフィラでも国々で戦争が起こっていた

シンシアの資源を横取りし、他の国より豊かになれば実質世界のトップになれると考える「マーズ」

新しい、セフィラでは採れない魔石に代わる資源を見つけようとする「ジュピター」

「マーズ」に攻められ、シンシアに救いを求めた「アース」

アースがなければ、シンシアの人はセフィラにはこれない、それにシンシアに攻撃を仕掛けていたのはマーズだけだったのでシンシアとアースの利害は一致し、両国は手を組むことになった

近代的な街並み、何もかもに機械が使われ、戦争中でも生活に不自由する者はいない、此処はセフィラの東側に位置するマーズの国

大きな建物が並ぶマーズの首都では戦争について、かなり大掛かりな会議が開かれていた

国のトップである七老院、王族、戦争機械科学者の代表達が集まっ

ていた

「アースは、まだ墜ちぬのか、我が国の技術ならばすぐにでも潰せるはずじゃが？」

「それが、アースの側の守りは想像以上に堅く、出力を上げるには魔石が不足しておりまして」

科学者は言った

「そ～れなら、街に使ってる魔石を使えばいいじゃん♪」

1人、椅子には座らず壁に寄りかかっている17、8歳くらいの少年は言った

「冗談は止めろ、これ以上我が民に負担をかける訳には…」

王は言った

「ふむ、しかし今生活に困っているものはおらんし、この長い戦争を続ける方が国民にとって負担ではないですかな？」

七老院の1人が言う

「そ、それは…」

「ほんとはさ～♪」

少年は言った

「本当は王様、アース組何じゃないの～♪前の会議でも～アース侵略は早すぎるとか言ってたけど♪」

「シデン！！貴様！！」王は怒鳴った

「あは♪怒られた」
シデンに反省の色はみられない

「滅多な事は言うなシデン、王には王なりに民の事を考えての事だ…」
七老院のひとりは言った

「さて♪どうかな～♪」

シデンは笑いながら会議室を出た

「魔石と幻石か♪」

「優秀な友達も見つけたし、そろそろいいか♪」

シデンはマーズを出てアースへ向かった

「ガイア」の森

「ここにドローマウス達の巣があるのか？」カナタは言った

「餌に困ってるとは思えないほど食料や水もあるぞ」ユークリッドは冷静に辺りを見渡す

「でも何かあるんだよね？ドローマウスが人間を襲うなんて…」テオが不安そうに言った

「フ！」
ドローマウスが鳴いた

「あっ！さっきのドローマウス！」テオが指を指す

ドローマウスは案内するように、森の奥へ進んだ

しばらく進んでドローマウス達の巣のようなものがあった

「これが、お前らの巣か」

ドローマウスの巣は深い洞窟のようになっている

「行ってみようか…」３人が洞窟に入ると突然、大きな鳴き声が聞こえた

「グアー！！」

「これは…」カナタは汗を流す

「ただ事じゃないかもな」ユークリッドはいう

「でも行かなきゃ」テオは先に進んだ

少し歩いた先に、大きな空洞に出た

「あれ？道が無い…」カナタはそういって空洞の中に入った

「…！カナタ逃げろ！！！」　ユークリッドは叫んだ

「ん！？うわ！！」
カナタは上からの何かからの攻撃をかわした

「コイツはツインリザード！」テオは言った

ツインリザードは名の通り２つの頭をもつ巨大なトカゲで一方が火

を吐き、もう一方は体全体を使って攻撃したりする

「まずいぞ！こんな凶悪なモンスター…ってカナタ！？」

カナタは敵に向かって突っ込んでいった

「でやぁぁ！！」

ツインリザード目掛け剣を振る、ツインリザードの左頭の左目に命中し、一撃で左側の視力を奪った

「何だ…結構チョロいぜ」

しかし、左目をつぶされたツインリザードは口から火を吐き出し、カナタへ攻撃した

「うおっとお！アブね～」カナタは間一髪それをかわした

「あの火は厄介だな」ユークリッドは言った

「任せて！」テオは自分の3倍以上大きな岩を押してツインリザードに突進した

ツインリザードは火を吐くが岩の盾で防がれ、岩に叩きつけられた

「グアーン」ツインリザードは叫んだ

「……」

「……」

カナタとユークリッドはただ見ていた

「ちょっと何やってるの！？トドメを！」

「……はっ！！そうだった！」カナタとユークリッドは我に返り、身動きの取れないツインリザードに向かって走った

「うらあああ！！！」

ドオォォン

その瞬間空洞を突き破り、ツインリザードより遥かに巨大なクイーンリザードが現れた

「……あっあは♪」テオは笑った

「グガアァァ！！！！」クイーンリザードは威嚇する

「逃げろぉ！！！」3人は逃げだした

全力で逃げる3人を追いかけ回すクイーンリザード

「出、出口だぁ！！！」

「く、駄目だ追いつかれる！！」

「お願い！アスカ！！！」テオはアスカを呼び出した

「グガアァァ！！！」クイーンリザードはアスカに火を吐くがアスカはそれを羽で防いだ

「おお！すげー」
カナタは驚く

「これが、幻獣…」ユークリッドは驚いたというより見とれている
アスカはすれ違いざまに攻撃し、クイーンリザードに徐々にダメージを与えていく

「いまよアスカ！！！」
テオの号令と共にアスカは光を一点に集中した

「レイ！」
と同時にアスカはクイーンリザードに光をぶつけた
クイーンリザードは光に飲まれ、消滅していった

「アスカ、ありがとう」テオはアスカを戻した

ドローマウス達をツインリザードから守り、森をあとにした3人は、半日程歩いたあと3人は野宿をすることにした

「いや～凄かったな幻獣！」カナタが興奮気味に話す

「光属性の幻獣か…あれなら確かに、兵器にも勝てるかもな…」ユークリッドは言った

「本当なら、幻獣も機械も人殺しの道具に何かならなかくて済んだのに…」
テオは呟いた

テオはアスカを呼び出した

「ごめんね…」そう一言誤った

アスカは空を飛び回った、アスカの羽が一枚、テオの手の上に落ちた

アスカが戻ったあともアスカの羽は消えることなく残った

テオはアスカの羽を大切にしまった

第４話［説得］

魔導師と召喚師の修行内容はほぼ同じ、シンシアの各地を周り、試練を行う

試練はシンシアに存在する国の首都で行われる

試練をクリアすると、戦争へ出されるのだ

テオ達が村を出て１ヵ月、ようやく休息をとるための街にたどり着いた

「これがハイレかー！」

「はしゃぐなカナタ、まずは宿を探そう」

「えっ？もう…まだお昼よ」テオは聞いた

「休める時に休んでおこう、先は長いし次はいつ休めるかわからないからな」ユークリッドは言った

「そうね…」３人は適当な宿を探した

その夜、ユークリッドはある物音に気づいた

「カナタ…」
それはカナタが外で剣の素振りをしている音だった
「寝れないのか？」ユークリッドも外に出ていう
「ユークリッド…」
「試練を受けるのはお前じゃないんだぞ？」
「わかってるよ！これは俺の秘密特訓だ幻獣より強くなってみせるぜ！？」
カナタは素振りしながら言った、どうやらアスカの強さをみてから、幻獣の強さに憧れたらしい
「……幻獣か」
「ん？どうしたユークリッド？」
「あっいや何でもない、それより程ほどにしとけよ！明日起きれなくなるぞ」
「だ～いじょぶだって！」

次の日

ユークリッドがカナタの寝ている部屋に行き勢いよく扉を開いた

「おい！起きろカナタ！！大変な事に…」

「んごぉぉ…んがぁぁぁ」

「お・き・ろ〜！！！」ユークリッドは耳元で叫んだ

「うるへぇぇ！！！！」寝ぼけたカナタはユークリッドに頭突きした

その直後カナタは眠りについた

「そうか、ならばお前へのお仕置き用に買ってきたこのバリカンで丸坊主に…」

「そっそれだけわ！！！！」

カナタは起き上がった

「さっさと来いカナタ！！外が大変な事になってるんだ！！」

「なっいったいどうしたんだよ！！！」

「とにかく来い！！」２人は外に出た

「あっカナタ！大変なの！！」外にいたテオが言った

「どうしたんだよ！あっあれは…」

そこには、３人組が宿の前で待っていた

「召喚師テオだな？悪いが試練は受けさせんぞ…大人しく自分たちの村に帰れ」

「誰だ？お前ら何でテオを知ってる？」

ユークリッドはリーダーのような男に聞いた

「答える義務は無い、それよりも召喚師テオを連れて村に帰るんだ」

「理由も教えずに召喚師に対して村に帰れ？せめて理由くらい聞かせやがれ…」

「ふむ…貴様は、テオが戦争に行ったとして…無事に生きて帰ってこられると思うのか？」

「……」

ユークリッドは黙った、事実戦争に行って生き残った召喚師は聞いた事が無い

「答えられないか…しかし、それでもテオを戦争に行かせるためのお前の行為はテオを見殺しにする事にならないか？」

男は更に続けた

「国の為、村の為に戦って何が残る？」

「…やめて」

テオが言った

構わず男は続けて

「そのためになら死ねると、戦争に向かった召喚師が一度でも戦争を終わらせる鍵になったか？結局は戦争を長引かせるだけだ…その間にも村や国の民は戦争で苦しむだけ…」

「おい…！」
カナタは男に言った

「まて、カナタ…最後まで聞こう…」
ユークリッドはカナタを制止した

戦争が始まってもう１０年、こういった考えを持つ者がいる事くらいわかっていた、もちろん実際に行動にでる者がいるのもわかっていた

だからこそ、ちゃんと話さなければならない、俺達の覚悟を…

「お前の言いたい事はわかった」
ユークリッドが口を開いた

「ユークリッド…」カナタとテオはユークリッドを見た

確かに男の言い分は間違ってはいない、自分達も他の召喚師達のようにならないとも言い切れない

しかし

「私は……」

「私は旅はやめません！」
テオは力強くそう言った

男の仲間であろう、女性が口を開いた

「あなたはそれで良くても、仲間は良いの？家族は本当に、あなたを召喚師として見送ってくれた？
絶対に帰って来いって…言われなかった？」

「……」

帰って来い？言われたよ、何度も、何度も…

でも、だから…

「言われました、何度も帰って来いと言われました、だからこそです！だからこそ…絶対にやめちゃいけないんです！振り返ったら…甘えちゃうから…」

テオは言った

「俺達の村も、テオの戦争行きを望んだ訳じゃない、でも…旅立ちの前の日…頑張ってとテオに言った村の子供も！無理はするな…テ

オは娘みたいなものだからと言ったラサおばさんも！すまないと謝ったおじさんも…テオの帰りを待ってる…戦争の終結を望んでる」

ユークリッドは言った

もう一人の男の仲間の、小さい女の子は言った

「それは、希望であって…現実じゃない…今戻っても誰も責めません！それどころか喜んで、お帰りと言ってくれる人達がいるはずです！それでも…行くんですか？」

「行きます…旅を続けます」

「どうしても？」
女性は言った

「はい…」

「テオは強いよ、いくら言っても聞くような奴じゃ無い」
カナタは言った

「そうか…これはいくら言っても無駄か…」

男はそう言った

「我等の負けだ、召喚師テオ…いや、戦うに値しないかもな…それほどの覚悟ならば止めはせん」

男はそう言うと、テオ達に背を向けた

女性は小さく手を振って、女の子は深くお辞儀をして男を追った

「何だったんだ、アイツ等？」

カナタは言った

「テオ、お前強いな…」

ユークリッドはテオに言った、テオは少し歩き、ユークリッド達に振り向いて言った

「旅…続けよ？」

ユークリッドとカナタは頷いた

朝にしては静か過ぎる街で、３人は再び歩き出した

第5話［寝癖］（前書き）

まあ、長い旅の休憩みたいなもんです

第5話［寝癖］

「ふぅ…ひどい寝癖だ…」

水面に映る自分の髪型を見てユークリッドは言った

ハイレの街から遠く離れた土地、ユークリッド達はここで野宿をしていた

宿代が無いわけでは無い、宿が無いのだ

野宿をする際、ユークリッドは誰よりも早く起きて寝癖を直さなければならない

長い金髪、寝癖が異常に目立つ

「こんなもんか…」

ユークリッドは寝癖を直し終わった

「さてと、お姫様が起きる前に…」

ユークリッドは立ち上がり、ハイレの街で買った剣の練習をした

「ふっ！はっ！」

片手で振れる程度の軽く、細身の剣を振り回し、汗を流す

「おっ頑張ってんな～ユークリッドォ」
ユークリッドより少し背の高く、黒髪のカナタがやってきた、こいつも寝癖ができている、気にしてないようだが…

「早起きだな…カナタ」
ユークリッドは手を休めない

「どうして急に剣の練習なんか始めたんだ？格闘技があるのに…」
カナタは言った

「銃や剣に素手で立ち向かうほど、アホじゃ無いからな俺は…」

「で、何でテオには内緒なんだ？」

「それは…」

努力してる姿って、カッコ悪いから…

こいつに言っても理解されないな
ユークリッドは言うのをやめて違う言葉を探した

「別に…疲れてるテオを起こしたくないだけだよ」

「…照れてるわけね」
カナタは言った

「あのな、どうして今のでそうなるんだ？」

「ユークリッドってわっかりやすいんだよね～」

カナタも剣を取り出して言った

「お前ほど単純じゃ無い…」

ユークリッドは右手に剣を構えた

「何を！？」
カナタも剣を構える、ユークリッドとは違い大きくて片手では振り回せないような大剣だ

カナタは片手で振り回すけど…

キィン

２人の剣が交わる

ユークリッドは旅に出てから、剣の練習もしていたが
本家のカナタと比べると若干劣る

「おりゃあ！！」
カナタはユークリッドの剣を弾き飛ばした

「くっ！」
痺れる手を押さえ、剣を拾おうとするが、次の瞬間首筋に鋭く、大きな剣が…

「ま、まいった…」
ユークリッドは両手を挙げて降参のポーズをとった

「へへっまた俺の勝ちだな！」
カナタは剣をしまって言った

喧嘩でカナタに勝った事が無い…ユークリッドの剣もレベルは上がったがかなわない

「ちっ！あんなアホみたいにデカい剣を何で片手で振り回せるんだ！？」

「貧弱貧弱ぅ！」
カナタは笑った

するとテオの声が響いた

「カナタ～！ユークリッド～！どこ～？」

「や、やべ！」
ユークリッドは慌てて剣をしまった

「何でそんなに焦るんだ？」
とカナタは呟いた

「あっこんな所にいた～何してたの？2人で…」
眠い目をこすりテオは聞いた

「な、なんでも無いよ！それより早く顔洗って寝癖直せよ！？」
ユークリッドは言った

「寝癖…」
テオは水面を見た

「……！！！」

凄まじい寝癖、テオの普段のような綺麗な茶髪のストレートヘアーを今日1日見る事はできなかった

第6話［時計塔］

ハイレの街を出てから三日
テオ達は大きな街、「エンゼ」にたどり着いた
大きな建物が並ぶ街並み、街の中心には大きな時計塔がある
「やっとまともなベッドで眠れるな…」ユークリッドは言った
「もうくたくただぜ～」
さすがのカナタも元気が無い、テオは…
「うわ～！キレー　見て見て、あの時計塔！　デッカーイ！」
「元気だねぇ　ウチのお姫様は…」
「は、早く休もうぜー！」
「あ、うん…」
テオ達は宿を探した
「ここなんかどうだ？　宿泊代もそこそこ安いし、何より中のレストラン、これは雑誌でも五つ星で紹介されてる」
とユークリッドは言った

「いや、やっぱりここがいいんじゃないか？　このホテルはスッゲーデカいし…」

「やっぱり時計塔が見える所がいいなぁ」

「あっじゃあ……ここなんかいいんじゃないか？」

ユークリッドが指を指したのは三人の意見をちゃんと盛り込んだ条件のいいホテルだった

少し高いが…

ホテル内のレストラン

テオ達はレストランで食事をとっていた

「これは！」

ユークリッドは驚く

「ガツガツ」

カナタは特に感想は言わずに食べている、いや流し込んでいる

「おい、カナタ！もっと味わって食べろよ！　こんなに美味しい料理滅多に食べれないぞ！」

ユークリッドは言った

「ユークリッドも、この綺麗な景色を楽しんだら？　これこそここでしか観ることができないよ」
テオは時計塔を見ながら食事をしている
確かに素晴らしい景色だ…
時間が夜なだけあって、街の光が時計塔を照らしている
「いつまでも見ていたいな、こんな景色なら…」
「守ろう……この景色を……この世界を」
「ああ…」
そうだな……
「さあ、もう部屋に戻ろうか……明日からまた旅が始まるんだ」
三人が食事を終えたあと、ユークリッドはそう言った
「その事なんだけどね、ユークリッド」
テオは言った

「明日、時計塔の中の聖堂の見学……しちゃ駄目かな？」

「聖堂？」
ユークリッドは聞いた

「駄目……だよね、旅……急いでるもんね」

「テオ、確かに俺達は先を急いでる、聖堂を見ている場合じゃない」

「おい！　ユークリッド！冷たすぎるぜ、いいじゃないか一日くらい」
カナタはユークリッドに言った

「でも、俺も聖堂にはとても興味がある」

「！　ユークリッド…」
テオはユークリッドを見た

「召喚師だって、休みは必要だ……明日は街を見学しよう」

「ユークリッドォ！　ありがとう！」

テオはユークリッドに抱きついた

「わっ！　よせテオ！わかった、わかったから」

「ははは、照れるな、照れるなユークリッド」
カナタは言った

「て、照れてねー！！」

ユークリッドは顔を真っ赤にして言った

そして次の日

「ここが聖堂か…」
確かに凄い、神秘的というか

作った人は何を思いこの建物を作ったのだろうか

この時計塔を建てたとき、街の人々はどれだけ喜んだだろう

街の人々の為に正確に時を刻むこの時計塔は、街で産まれる命も祝福する

子供が産まれる度に聖堂で子供は名前を与えられるからだ

「凄い…」
テオは聖堂の造りを見て言った

「う～ん、俺には分からんな～」
カナタは言った

すると、突然テオ以外の女の人の声が聞こえた

「やっぱり、いい所だろ？この時計塔…」
赤く、長い髪で背の高い女性はそう言って近づいてきた

「あなたは？」
テオは女性に聞いた

「ああ、ごめんよ、突然……アタシはセトリ、おじいちゃんが建てたこの時計塔を見てくれてる人がいて、嬉しくてつい…ね」

「セトリさんのおじいさんがこの時計塔を？」

「ああ、正確にはおじいちゃんは私のおばあちゃんへのプレゼントとして、この時計塔を建てたのさ」

「それはまた…」
大層なプレゼントだな…
「あれ？　でも時計塔は街の資産に指定されてますよね？」
テオは聞いた

「ああ、最初はおばあちゃんの時計塔だったんだけど……おばあちゃんが亡くなった後にね、書いてあったんだ、この時計塔を街の人々の為に使ってくれって、だから今、この時計塔は街のシンボルになってるんだ」

「へぇ～でもそんなに前から建てられた時計塔なのに随分綺麗なんですね」

「街の人達がね、この街から子供が産まれる度に時計塔を綺麗に掃除するんだ、その日は中の聖堂に時計塔の鐘がなるよ」

「なるほど　それで祝福か…」
ユークリッドは頷いた

「深えな…」
カナタは言った

「良かったら　アンタら三人ウチにくるかい？　昔の時計塔やおじいちゃん達の写真もあるんだ」

「ええ！　是非見たいです」

「僕も興味があります」

「右に同じ」

「よし！　じゃあ行こうか」

こうしてテオ達はセトリの家に案内された

この街では珍しい木造の家だが、大きく綺麗な外見だ

壁には時計塔や時計塔を建てた人達の写真が掛けてあった

「これが若い頃のおじいちゃん、こっちがおばあちゃんだよ」

セトリは、時計塔の前で立って写真に写っている男女の写真を見せた

「こ、この綺麗な人がセトリのおばあちゃん！？」
カナタは驚いた、気持ちは分かる、凄い美人だ

「二人とも幸せそうですね」テオは言った
「ああ、だろ？　おじいちゃんもおばあちゃんも最後まで幸せだったって言っていたよ…」

すると、時計塔の鐘が突然鳴り出した

ゴォーン

ゴォーン

ゴォーン

「な、何だ！？」
カナタは窓から見える時計塔を見た

「バカな…今日は出産式の予定は無いはずだよ！」

「その出産式以外で鐘が鳴る時は？」
ユークリッドはセトリに聞いた
「誰かが時計塔をいじってしまわない限りそんな事は無いはずさ…」

「とにかく行きましょう！」
テオ達は時計塔へ向かった

「なるほどな…この時計の魔石…これで時を正確に刻んでいるのか…」
髪、服装を全て黒で統一している男が時計塔の上で魔石を手にして言った

「後はこの魔石をシデンに渡すだけか…」
そして時計塔の上から見える美しい景色を見た

「美しい街だ……」

第7話［発砲］

テオ達三人とセトリは時計塔へ走っていた

ゴォーン

ゴォーン

鳴るはずのない時計塔の鐘が鳴っているのは、何者かが時計塔を荒らしているからに違いない

テオ達は時計塔までおよそ一キロの距離を全力で走っていた

「セトリさん、荒らされたと言うが…　具体的にどうされたら鐘は鳴るんですか？」
ユークリッドは走りながらセトリに聞いた

「わからないよ！　そんな事は今までに無かった…」
とセトリは答えた

「とにかく急ぐぜ！」
カナタはさらに走るスピードを上げて言った

ゴォーン

ゴォーン

時計塔の鐘はまだ一定のリズムを保ちながら鳴り続けている

時計塔

午前十一時二十八分を示す時計の巨大な針の前に　黒ずくめの男は立っていた

男の左脇にはバスケットボール並みの大きさの魔石が抱えられている

男が街に見とれていると、時計塔の下から何か叫ぶような声が聞こえてきた

「おい！　貴様この時計塔に何をした！？　今すぐに元に戻せ！」

中年の男を中心に百人程度の街の住民が時計塔を囲んだ

「出ていけー！」

青年は言った

「私達の時計塔を返せー！」
女性は叫んだ

「ワー！　ワー！」
住民達は男に向かって訴える

パァン

突然、男が時計塔の上から空に向けて発砲した

一瞬で住民達は静まり返った

すると男は口を開いた

「この美しい街の住民達よ！　私はしばらくこの美しい音と美しい景色を見ていたい…　どうか見逃してくれないだろうか？」

「ふ、ふざけるな！　よそ者が俺達の時計塔を荒らすなー！」　最初に叫んだ中年の男性は言った

「そうだ！そうだー！」

街の住民は再び男に出ていけと訴える

「これはいくら頼んでも無駄か…」

男の右手にある銃が光りだした

男は銃を街の住民に向けて言った

「ならば私は一度退くとしよう、しかしこの魔石は頂いていくぞ」

「待て！　その魔石は時計塔の針を正確に刻む為の魔石だ！今すぐに元に戻せ！」

走ってきたセトリは言った

「詳しいな街の女性よ、詳しく時計塔の事を聞きたいが時間が無い…　この魔石に代わるような金額なら用意するが…どうだろう？　譲ってくれないか？」

男は言った

「冗談じゃない！　その魔石は時計塔の……街の一部だ！　お金で買える物じゃ無い！」

セトリは男に言った

「テオ、アイツ次第では戦闘になる…もしそうなればお前は少し離れていろ」

ユークリッドは言った

「でも…ユークリッド！」

「俺達がやられると思うかい？」

カナタが言った

「……カナタ、わかった　でも話し合いで解決できるなら…」

男は時計塔から飛び降りてきた

ザワッ

住民は男が突然飛び降りた事に驚くが、男は見事に着地に成功した

「ならば、仕方がない…あまり乱暴な手を使いたく無いが…」

男はセトリに銃を向けて言った

「！！」
セトリは男を睨む

「おい！　ヤバいぞユークリッド！」
カナタは言った

「行くぞ！」
ユークリッドとカナタは剣を構えた

「待て、私は出来れば撃ちたくない…あくまでも銃は交渉の道具、発砲して人を殺してしまえば私は恨みを買うだろう……いくら力の無い子供だろうが、女性だろうが……復讐だけは厄介だからな」

「魔石をどうしようっていうんだ？」
カナタは言った

「聞きたいか、住民よ」

（俺達は住民じゃ無いが…）
「答えられるなら答えて頂けますか？」
ユークリッドは言った

「……私は、高い景色が好きだ…」

「…？」

（何言ってるんだ？コイツ）

「機会があればやってみるといい…この時計塔からの景色も素晴らしい…しかし…」

「……」

セトリは拳を握りしめた

「ならばもっと高い景色ならばどうだ？　素晴らしいに決まっている……友と一緒に見る景色は特にな…」

「それがいったいこの魔石に何の関係があるんだ！？　冗談じゃない！高い所に登りたいだけならセフィラにでも行きな！！」

セトリは言った

すると男は笑みを顔に浮かべ

「セフィラ……その通りだ…私は魔石を持っていく条件でセフィラ行きを許された…」

「何だって！？」
セトリは驚いた

シンシアの住民がセフィラ行きを望む…そんな事があるのか？
セトリは信じられないような表情をした
「質問には答えた…見逃してくれないならば　戦うしかないな…」
男は銃を構えた

「やるのか！？」
ユークリッドは細身の剣を右手に構えた
右足を前に出し、剣の刃の部分を敵に向けた

「腕がなるぜ！」
カナタも巨大な剣を構える
両手で剣を縦に向けた

「面白い…」
男は銃に力を込めた

パァーン

銃が街に響いた

第8話［装填］

銃声が鳴り響くとともに街の人々は避難した

男は発砲した先を見て言った

「ほう…」

シュウウウ

カナタは銃の弾を剣の大きな横腹で受け止めた、剣には少し焦げた部分ができたものの　刃物としての機能には別状ない

（残り四発…）

男は威嚇のために撃った弾と今カナタに向けて撃った弾を　元々銃に装填していた弾の数からマイナスした

（銃の形状からして…残り五発か四発……さっき走ってた時に聴こえた銃声と合わせて引くと……あと四発と考えるのが妥当…）

ユークリッドは瞬時に敵の弾の数を計算した

男も銃を構えたまま立ち止まっている　互いに牽制の間合いだ

「……」

（カナタは弾の数をわかってないだろうな…　伝えなければカナタは暴走しちまう…　どうやって伝えるか…）

「来ないならこっちから行くぜ！」
カナタは剣を両手に構えて言った

（…！　まずい）
「まて！　カナタ……あと…五発耐えてからだ！」

「五発！？」
カナタはユークリッドに聞いた

「奴の銃の形状からして込めることのできる弾は六発……さっき一発撃ったからあと五発だ！」

ニヤッ

男は笑った

「そういうことか…」

「じっくりまてカナタ……持久戦だ」

「……ああ」

パァーン

「くっ！」
ユークリッドは細い剣を使い、弾を叩き落とした
カナタとは違い細い剣で、さらに力の弱いユークリッドなのでダメージは剣よりもユークリッドの手に伝わった

「……」
ユークリッドは痺れる右手を見た
（まだ動く…が　次受けたら骨がマズいな）
（残り三発）
ユークリッドと男の考えは一致した
「大丈夫か？　ユークリッド…」
「平気だ…」

「ふ…」

パァーン　パァーン

銃声が二発

カナタとユークリッドはまた剣で弾を落とす

しかしユークリッドはまた右手にダメージを負ってしまった

「ぐっ…」

（やばいな…骨が…）

「ユークリッド…！」

カナタはユークリッドを見た、右手の様子がおかしい…

「カナタ…すまない　右手が限界だ…」

ユークリッドは言った

「わかった…」

カナタはユークリッドの前に出た　ユークリッドに弾を向けさせないため

「あと二発受けたら突っ込むぜ」

カナタは言った

ユークリッドは頷く

（あと一発…）

ユークリッドは剣を左手に持ち替えていた

「カナタ…と言ったか？それとユークリッド…」

男は口を開いた

「？」

「これなら……どうだ？」

男はテオに銃を向けた

「！！」

「てめっ！」カナタはテオをかばおうとする

「動くな！……動いていいのか？」

男は言った

「お前がその女をかばおうとすると　負傷しているユークリッドはどうなる？」

「ちっ！」
カナタは舌打ちした

「左手に持ち替えたようだが…弾を叩き落とせるのか？」

「……」

「考える時間は与えん…　ジ・エンドだ…」
男はテオに向けて銃に力を込めた

「行け！　カナタ！」

「クソッ！！」
カナタはテオの所に走った

「にぃ」
男は笑って銃の向きをユークリッドに向けた

「しまった！」
カナタは急停止してユークリッドに走った、しかし間に合わない

パァーン

弾はユークリッドの剣に当たった

ギャイイン

ユークリッドの剣は弾き飛ばされた
ユークリッドはあえて剣に力を込めずに剣を使い捨ての盾としてのみ使った

弾き飛ばされた瞬間にユークリッドは男に向かって走っていた

「何！？」

「悪いね！」
ユークリッドは驚いた男の腹に蹴りを入れた

「ぐはっ！」

男はよろめく

ユークリッドは体制を入れ替え、左手のみで自身を支えた体制で男をさらに蹴りつけた

「ぐあっ！！」

男は吹っ飛び、時計塔の聖堂の白い外壁に衝突した

「アンタの弾は残り四発…俺はカナタを抑えるのとアンタを騙すために五発と言ったのさ…」

ユークリッドは言った

「すっげ～ぜ！ユークリッドォ」

カナタとテオが走ってきた

「でも、右手は大丈夫なの？」

「骨は折れたな…しばらくは剣の練習もできん…」

「待って…！アイツ立つよ！」

セトリは叫んだ

男はよろめきながらこちらに歩いてきた

「おい！　無理するな……その魔石を返せば逃がしてやる」

カナタは言った

「フッ…　私はお前達を過小評価していたようだ…　実弾で勝てる

と思っていたが…」
男は銃をユークリッドに向けた
「弾…入ってないんだろ？　吹っ飛ばしたあともお前に弾を装填する素振りは無かった…」
ユークリッドは男に言った

「今から入れる」
男は言った

「させると思うかい？」
カナタは剣を男に向けた

「ふふふ…」

「！！」

男の体から光の弾が現れた

（まさか……一、二、三…六…）

ユークリッドは光の弾を数える、六発　男の銃の装填数と同じ

光の弾は男の銃に取り込まれた

「装填完了」

「ちっ！」
カナタは剣を構えて男に切りかかった

ブン

カナタは剣をなぎ払ったが、男はジャンプをしてかわした
そして男はそのまま時計塔の上へ

「なっ！」

カナタは驚いた、ジャンプしてあの時計塔まで…

（少なくとも十メートル以上……俺達じゃあ無理だな）

「では行くぞ？」

男は時計塔の上から発砲した

パンッ　パンッ　パンッ

「くっ！」
カナタは銃を全て剣で弾いた
三連発　カナタの剣も限界だった

（ヤバい……剣にヒビが）
カナタの剣に亀裂が走った

「テオ！　アスカを呼んでくれ！」
ユークリッドはテオに言った

「わかったわ！　お願い！アスカ！」

「アスカ…？」
男はテオを見た

テオの祈りとともにアスカは幻石から現れた

「おお！」

男はアスカに魅入っている

「幻獣……アンタ達召喚師だったのかい！？」

セトリは言った

「ええ…　テオが召喚師です」
ユークリッドはセトリに言った

「頼もしいねぇ」

「ええ…強いんですよ　テオは」

「アスカ！　行って」
アスカは男に突っ込む

「くっ！」

パンッ　パンッ

男はアスカに向けて発砲するが、アスカは構わずに突進する
「はっ！」
男は時計塔から飛び降りてアスカの攻撃をかわした

パァーン

男は最後の一発をアスカに、今度は下から撃った

「ちっ！」

しかしアスカには全く通用しなかった

「ならば！」

男の体から先ほどより大きな光の弾が

「…！！！」

（さっきよりずっとデカい！）

ユークリッドは光の弾を見た

「〈マジックトリガー〉　私の魔力でできた光の弾だ　大きければ大きいほどに威力は上がる」

光は男の銃に取り込まれた

「行くぞ！」

ズアッ

男が撃った弾はレーザービームのような軌跡を描き、アスカに直撃した

「アスカァ！！」
テオはアスカに叫んだ、アスカは直撃はしたがなんとか耐える事ができた

「ふふふ…　はっはははは…はーっはははは…」
男は笑い続ける

「どうやら　私の勝ちのようだな…」
男は動けないアスカに銃を向けた

「やめろぉ！」
カナタは男に突っ込む

「ふ…」
男は銃は使わず、カナタの攻撃をさばく

キィィン

男はカナタの剣を銃で受け止めた

「無駄だ…貴様は私を倒せない…　何人来ても同じだ！！」

男は銃で剣を振り払った

「ぐあっ！」

カナタは吹き飛ばされた

「そこで黙って見ていろ…　美しいものが美しい死を迎える様を…」

男は体から光を出した

今までで一番大きな光、まともに喰らえばアスカもただでは済まない

「テオ！　アスカを戻せ！」

ユークリッドは言った

「そんな事をしてみろ……私は時計塔に向けてこの弾を撃つぞ？」

「くっ！」

「幻獣をとるか…時計塔をとるかだ」
男は言った

「魔石を……やるよ」
セトリは言った

「セトリさん！？」
テオはセトリを見た、セトリが言った事が信じられなかった

「魔石…か　いいだろう、私は何も殺さずに魔石を頂いていけるのだからな」

「駄目だ！　セトリ！」
カナタはセトリに言った

「アタシは！　時計塔が形として保っていればいいんだよ…」

「セトリ…」

男は口を開いた

「話はまとまったか？　ならば私は行くとしようか」
男は立ち去ろうとする

「待て！　お前は何者だ！？」
ユークリッドは聞いた

「何者？　名前を答えればいいのか？」

「名前もそうだが……お前は何でこんな事をするんだ！？」

「目的は先ほど言った通り、魔石をある人物に渡してセフィラへ行く、名前は……」

男は歩きながら言った

「名前はファントム、お前達がセフィラに来ることがあればまた会おう」

ファントムは街から立ち去った、戦利品の魔石を抱えて

ゴォーン

ゴォーン

ゴォーン

時計塔の鐘は戦いが終わった後も鳴り続けていた

第9話［双子］

時計塔が止まった

魔石の力で時間を正確に刻んでいた時計塔は魔石を失い、ついに止まってしまった

セトリの家

怪我をしたユークリッドに、最低限の処置を施し、テオ達はセトリの家にいた

「……な、な～にしょぼくれてんのよ！　みんな」

わざと明るい声でセトリは言った、無理をしているのがわかる

「すみません、セトリさん…私達がもっと強ければ…」

テオは時計塔を守れなかった自分を悔やんでいた、それはユークリッドやカナタも同様である

「アイツ…　ファントムって言ったか？　今すぐに追いかけよう！

魔石を取り返して時計塔を直そう！」
カナタは言った

すると家の扉がガチャガチャと音をたてた　そして扉の外から誰かの声が聞こえてきた

「うお～い！セトリ～開けてくれ～！」

男性の声だ

「なんだ、ククリかい？　その扉は押すんじゃなくて、引かないと開かないよ！」
男の名はククリというらしい、やりとりから察するに頭は悪そうだとユークリッドは思った

「あっ！　そうだった引くんだった」
そう言いながら、ククリという男は入ってきた、身長は１６０センチ位、髪は赤く、逆立っていて、人の良さそうな笑顔を振りまいている

「あれ？　誰だ、そいつら？」
ククリはユークリッド達の顔をジロジロと見ている

「自分から名乗ったらどうだ？　そうすれば俺達も答える」

ユークリッドは目を閉じながら言った、ユークリッドはどうもこういうタイプの人間は好きでは無く、わざと無愛想に振る舞う事がある

「人の家で随分な態度だなぁ」
ククリは言った

「人の家？」

「あ、ああククリはアタシの双子の弟なんだ」
セトリは言った

「双子！？」
カナタは驚く、誰がみてもセトリの方が大人っぽいというか、ククリの方が年齢よりもずっと幼そうに見える

「そこ！　何驚いてんだ？」
ククリはカナタを指差した

「セトリさんと同じって事は…えっと」　テオは言った

「アタシと同じ十九だね」

「……年上だったのか」
ユークリッドは言った、セトリは容姿や雰囲気から自分より上だとわかるが、ククリに対しては逆の印象をうけた、多分自分より下だろうと

「そうだ！　お前よりも年上だ！　だからお前から名乗れい」

「俺はユークリッド…」

「私は召喚師のテオと言います」

「カナタ！　よろしく！」

ククリは、ふ～んといった表情でユークリッド達を見渡した

「おう！よろしくなテオ、カナタ、あとえ…とユー……何だっけ？」

「ユークリッド！」

そうそう、とククリは頷いてセトリの隣に座った

「で？　なんでカナタ達は家にいんの？　セトリの友達？」
ククリは言った

「おじいちゃんの時計塔の魔石がファントムって奴に盗まれたんだ、それを止めようとしてくれたんだけどダメで……」
セトリが言い終わる前にククリは席を立った

「じいちゃんの！？　なんですぐに追いかけないんだ！　早く取り返しに行くぞ！」

「最後まで聞きな！　ユークリッドがファントムにやられて怪我をしたんだ、処置をするために家に寄ったんだよ」

「じゃあ俺一人で行く！　俺一人で魔石を取り返す！」

「ムチャだよ！　幻獣ですら負けたんだよ」

「でも……」

「……私が…私達が魔石を取り返します！」
テオは言った

「テオ！？」
カナタはテオを見た

「……テオ、お前なら絶対に言うと思ったが…」
ユークリッドは言った
「俺は反対だ、ククリやセトリさんには悪いが　俺達の目的は戦争を一刻も早く終わらせる事だ」

「わかってる…でも…」
テオは立ち上がった

「でも、目の前の人も救えない召喚師が、戦争なんか止められないと思うの…」

「……」
しばらくユークリッドとテオは見つめ合っていた

「……お前がそれでいいなら…」

「ユークリッド…」

ユークリッドは立ち上がって言った

「セトリさん、ククリ…そういうわけです、俺達はファントムを追う」

「どうしても行くのかい？　アンタの旅の目的とは違うんだよ？」
セトリは言った

「テオは止めても無駄だよ　行こうぜ！」カナタは立ち上がって言った

「俺も行く、魔石が盗られた時に街にいなかった俺にも責任はあると思うし…」

「ククリが行くんじゃ、アタシも行くしかないね」

「セトリさん…ククリさん…」

「なら、早く行こう　ファントムはどんどん先に行ってしまう」

ユークリッドは言った

テオ達はファントムを追うため、街を出た

第１０話［魔石］

オゼの村

この村は、戦争の被害を第一に受け、今は人は住めない村になっている、シデンはここをアジトにするのが一番だと考えた

シデンがセフィラからシンシアに来た理由は魔石の探索、これはシデンの独断で、シデンもマーズでは七老院の次に高い地位にあるため、自由な行動をとることも他の兵に比べてとりやすい

シデンの戦争での活躍、武装したアースの戦士五十人を三分で皆殺しにしたこともあり、七老院もシデンをそばに置くのは危険と考え、シデンのシンシア行きは目を瞑った

アースの魔法障壁による防御作戦で、一時停戦状態にあるため、シデンは自分の時間が取りやすくなった

「相変わらず、空気が綺麗だねぇ♪ここは」

オゼの村は昔、魔石が大量に採れる村だった、しかし戦争に使われる魔石や、戦争の被害により魔石の数は減り、今では全く魔石の採れない、採れても何の魔力も持たない魔石ばかりだった

森の中に建てられた家、大木に穴を空け住めるようにした家、どれもこれも、セフィラには無い家ばかりでシデンにとってはどれも魅力的なアジト候補だった

しかしその中で最もシデンが気に入った家は、案外普通の木造の家

他の家とは違い形だけはマーズの家と似ている、それだけの理由でシデンは村の中央に位置するこの家をアジトに選んだ

しかし、ここで問題点が出た

シャワーだ、人の住んでいないこの村、当然シャワーなんぞ浴びれるはずが無い
シデンも一日くらいシャワーを浴びなくとも我慢できるが、二日三日となると話は別だ
これは早々に解決しなければならない問題だとシデンは思った

「水は……あるけど冷たいのは……さて、どうするかな♪」
シデンは楽しそうに言った、例え楽しくなくとも楽しそうに振る舞う、シデンにとって笑顔は標準装備だ　一人だろうが笑顔は絶やさない

「仕方ない、他の街のホテルででも済ますか♪」

この村でシャワーを浴びるのは無理そうだったので、街のホテルでシャワーを浴びる事にした　資金面ではマーズから沢山でるので問題は無い　ホテルに泊まればいいのだが、シデンはこの村が気に入ってしまった
魔石を採りに行き、帰りにホテルにでも寄ればいいと考えた

「とりあえず、昔魔石が採れたっていう採掘場所に行くか♪」

魔力の宿っていない魔石でも何か発見があるかもしれない、それに採掘所は危険なモンスターの巣窟、まだ発掘されていない魔石もあ

るはず
シデンはそう考え、まずはオゼの採掘所を探してみる事にした

オゼの採掘所

オゼの村から、少し離れた場所にある採掘所
とても大きな洞窟になっていて、古ぼけて読めないが、何かの注意書きがしてある看板もある

シデンは二本の刀を腰にかけて、洞窟に入った

薄暗い洞窟、途中壁が崩れ、通る事のできない所がいくつかあったが
すぐには突破できそうにないので後回しにした

一時間後

「ふぅ…これだけ探してやっとこれだけか♪」
シデンの手には二つの魔石が握られている、両方とも魔力は失われていて使えそうにない、シデンは魔石をカバンにしまった

「じゃあ、今日はここで最後にしようかな♪」
シデンがそう言って立っているのは、閉ざされた壁の前

シデンは二本の刀を構えて壁を、縦の長方形の形に斬った
すると壁はその部分のみがくり抜かれ、シデンが通るのに丁度いい

形になった
しばらく進むと、まだ人が手をつけていないであろう採掘所に出た
「当たり～♪」
シデンは楽しそうに壁に埋まった魔石を刀でくり抜き、取り出した
するとシデンの来た方向から巨大な足音が聞こえてきた
「モンスターか♪」
シデンは一体岩陰に隠れ、様子をうかがう事にした
ズン　ズン　ズン
大きな足音をたてシデンのいる採掘所に入ってきたのは、魔石の魔力を食うモンスター、スティール
スティールは、シデンが採掘所への道を開けた事で、魔石の匂いを感じとり、やってきた
蛇のような外見に五メートル以上の巨体
（素手では勝てないな♪）
シデンはそう思い、刀を握ったが止めた　魔石を試したくなったからである
「この魔石…やってみるか♪」
シデンは岩陰から出て、蛇型モンスター、スティールと対峙した

「シャアア」
スティールはシデンを威嚇した、本来スティールはおとなしいモンスターで、他の動物でも襲ったりはしない
ただし例外もある、それはスティールが産卵の時期である事、その場合は自分よりも強いモンスターをも、子を守る為に戦う
もう一つは、空腹である事、スティールは蛇の性質を持ったモンスター、何日も飲まず食わずでいられるが、限界を越えると暴走する
今のスティールは後者に属する、魔石不足で餌の無くなったスティールは一般のハンターでも捕まえられない　危険度Ａの凶悪モンスターだ
（蛇みたいな外見に太く丈夫そうな足……打撃で戦うのは避けるか♪）
シデンはスティールの外見を見ただけで、スティールの戦闘力をほぼ見切った
「ガァァ！」
スティールは尾を振り上げ、シデンに叩きつけた
シデンはバックステップしてかわすが、すぐに次の攻撃が飛んでくる
スティールは尾を横に振り回し、シデンをなぎ払った

「！！！」

攻撃はシデンに直撃し、シデンは壁に叩きつけられた

「痛いな♪」

シデンは立ち上がり言った、笑顔は絶やさなかった

「僕の魔法……見せてあげるよ♪」

すると、シデンの右手に握られている魔石から黒い霧が出てきた

黒い霧はシデンを覆い隠して、更に採掘所全体にまで及んだ

ザシュ

採掘所を覆っていた霧が晴れると、そこには首の無いスティールの姿があった

首から上は、シデンの左手に握られている

「ふふふ♪」

シデンは首を放り投げ、魔石を見て笑った

「気に入ったよ♪この力」

シデンは、魔石をしまうと洞窟を後にした

第１１話［霧］

オゼの採掘所

シデンは、気に入った魔石を手に入れ、採掘所を後にした。

シデンの手にした魔石の能力は〔霧〕。

黒い霧を色々なモノに変えて攻撃したり、霧で煙幕を張ったりする事ができる。

スティールとの戦闘でシデンは、霧で自らを覆い隠した後、霧で視界の悪くなった隙にスティールを倒した。

魔石を手にしたばかりのシデンは、霧を別のモノに変える事がまだできなかった。

「色々試す必要があるな♪」

シデンは魔石探しを一旦中止し、オゼの採掘所で霧の能力を色々と試していた。

そして三日が過ぎた。

「ふふふ♪霧でこんな事ができるなんてねぇ♪」

シデンの右手には、黒い剣が握られている。

シデンは霧を剣に変える事に成功した。

シデンの霧の剣は一度発動したら、霧の剣によって血を誰かが流すまでしまう事ができない。
このルールはシデンが勝手に決めた。

魔石で特殊能力を使う場合、魔石本来の能力（シデンの魔石なら黒い霧を出す）以外で、霧を剣に変えるなどの応用技を使う場合には、イメージと魔力を一致させる為に、何らかのルールが必要となる。

応用技は、霧を武器に変えたりと様々だが、魔石本来の能力からあまりに離れた技は使用できない。
例　霧を炎に変えるなど

剣に変える場合も、シデンが実際の剣をイメージできなければ作り出せない。
更に、シデンは霧の剣に血を吸わせるというルールを作り、霧の剣の切れ味は増した。

ルールが厳しい程、魔石の応用力や威力は上昇する事は、シデンは三日で気づいていた。

「これなら手ぶらを装えるし、切れ味も刀より上だ♪後は他にも応用が利くか試すか♪」

シデンは霧を、自分が完璧にイメージできるモノに変えていった。

その数は三十を超えた。

お気に入りの服、好きな本などの戦闘に必要の無いモノや、剣の他にも刀や盾、更には一体のみではあるが自分の分身も、霧で造りだす事ができた。

グラッ

シデンは突然、目眩がしてよろけた。

「魔力の……使い過ぎ……か」

シデンはよろけた足で採掘所を出た。

自分の体という、シデンの魔力の総量と同等程度のモノに変えてしまった為に、シデンは魔力不足で、極度の疲労状態になった。

「しばらく……村で休むか…」

シデンは無人の村で魔力を回復させた。

完全に魔力が回復するまで、二日かかった、霧の使い過ぎには注意しようとシデンは思った。

完全に回復した後、シデンはまた採掘所へ向かった。

魔石探しを再開する為だ。

オゼの採掘所

シデンはまだ行った事の無い場所にでた。

「……」

何故か感じる嫌な気配、モンスターではないが、それに近いものを感じる。

シデンは荒れた洞窟をしばらく嫌な気配のする方へ進んだ。

すると、壁に一枚の絵が掛けられていた。

「……これは…」

見たことがある、この絵を自分は知っている…でも

「どこで……？」

絵は、城とその城下町が描かれていた。

しかし、シデンの知っている絵とは少し違った。

「……人が…いない？」

絵には全く人が描かれていなかった。

「……」

シデンは絵に近づき、絵の裏を見た。

裏面には絵のタイトルが書かれていた。

「置いていかれた城……これは…S？」

Sという文字も書かれていたがシデンには何かわからなかった。

それ以上にわからないのが絵のタイトル、置いていかれた城

「どうゆう意味だ？……S……S…」

普段のシデンならば興味が無いと、放置する問題。

しかし何故か、この絵が気になった。

この絵から、嫌な気配がしたからだ。

「……持って帰るか…」

シデンは絵を手に取り、洞窟を出ようとした。

しかし、シデンが絵を抱えた瞬間、シデンは絵に吸い込まれた。

一瞬、シデンが絵に吸い込まれるまで、二秒ほどしか、かからなかった。

シデンを取り込んだ絵はヒラヒラと宙を舞ったあと、地に落ちた。

コツ　コツ　コツ

シデンが絵に取り込まれてすぐに、絵に向かった人間がいた。

「……これね…」

女性。というよりは、まだ子供、十三歳くらいだ。

肩までかかるくらいの赤い髪、上下とも黒い服で、眼も赤い。

少女は絵を手に取り、言った。

「やっと会えたね……」

兄さん

第１２話［魔女］

絵に吸い込まれたシデンの意識が戻ったのは三日経ったあとだった。

「……」

目を覚ましたシデンは、まず辺りを見渡した。

シデンが倒れていたのは、オゼの洞窟内ではなく、ベッドの上だった。

「目が覚めたのね」

シデンが寝ていた部屋に入ってきたのは女性。　一六歳くらいである。

「…君は？」

「私の名前？　サリアよ、よろしくねシデン」

「…何故僕の名前を知っているのかな？」

「説明が必要かしら、っていっても倒れているあなたを助けただけだけどね」

女の名前はサリア、赤い髪に黒い服、短めの黒いスカート姿だ。

「ごめんなさい、助けた時に身の回りのものを見てしまったの。中にあなたの名前が入った写真があったから…」

とサリアは言った。

「ああ…　あれか、構わないよ。　それよりもお礼を言わなきゃね、助かった　ありがとう」

「そ、そんなの気にしないでいいの！　それよりハイ！　パンがあるから食べなさい」

サリアから強引に渡されたパンを受け取ると、シデンはクスッと笑って言った。

「ありがとう、頂くよ♪」

「ふん…」

サリアはワザと不器用に部屋を出ていった。

「なかなか美味しいな♪　このパンは…って言ってる場合じゃないな…ここはどこだ？」

シデンは食べかけのパンを手に持ったまま、サリアの跡を追いかけた。

「サリア！」

「あ、シデン…駄目じゃないまだ起きたら…」

「いや、体は問題ないよ、それよりもここはどこなんだい？」

シデンは家を見渡した。　木の造りで、あまり良い暮らしをしてい

るとは思えなかった。

「オゼの村よ、知らなかったの？　あなたこの村の人じゃないの？」

「オゼ？　オゼって……あれ？」

「…どうかしたの？」

シデンは自分の立場、オゼの村での事、絵に吸い込まれた事を話した。

「……」

サリアはしばらく考えこんだ。

「絵に吸い込まれたのは、魔法か何かかしら、聞いたことない魔法だけど…」

「やっぱりあれは魔法だったのかい？　それで僕の知らないオゼの村に飛ばされた…」

「そうなるのかしら…。　で、分からない事がまだあるんだけど、セフィラって何？」

「えっ…」

シデンは言葉を失った。　戦争中で、誰でも知っているはずのセフィラを目の前にいる女は知らないと言った。

「いや、今は戦争中だろ？　セフィラとシンシアを知らないはずはないじゃないか…」

「シンシアは知っているわ…　昔は第二大陸って呼ばれていたけど…」

シデンの知っているシンシアも元は第二大陸と呼ばれていた。

「セフィラなんて聞いた事ないわ……あ！もしかして」

「何だい？」

「もしかして、あなたの言ってるセフィラって処分国の事かしら」

「処分国？　物騒な名前だね♪何だい？処分国って」

「かつての第一大陸の名前よ、魔法を使えない人間を昔大量にその国に押し込めたらしいの、魔女クレアラディがそうしたらしいけど…」

「魔女…クレアラディ？」

「…知らないか、あなた本当にどこから来たんでしょうね」

「そんなに有名な人なのかい？　その魔女は」

「有名なんてものじゃないわ、神様扱いよ、今じゃ」

「へぇ、会ってみたいな♪」

シデンは自分の仕事を忘れ、魔女に興味を持った。

「会えるわよ？」

「…え？」

こんなにあっさり言われるとは思っていなかったシデンは、意外な答えを言ったサリアを見た。

「面会するには、最低二週間前から予約しなきゃいけないけどね」

「二週間は…長いな、近くにいるのかい？　魔女様は」

「近いわ、この村からなら歩いて二時間くらいかな」

サリアは窓の方を指差した。

「……案内頼めるかい？」

「ち、ちょっと…本気？　会ってどうするのよ」

「違うよ…」

シデンは口元だけ笑って言った。

「処分国にさ♪」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3847f/

fantasy

2010年12月7日02時59分発行